

## 2024年1月14日顕現後第2主日説教

サムエル記上3章1-10節

コリントの信徒への手紙一6章11b-20節

ヨハネによる福音書1章43-51節

先週の1月9日から本格的に改修工事が始まりました。聖堂の外観を見て驚かれた方も多いかもかもしれません。教会歴は、顕現後第2主日となりました。顕現節の福音書は、先週の顕現後第1主日でイエス様の洗礼の出来事を学ぶことから始まり、大斎節に入るまでイエス様の活動について振り返って学びます。使徒書に関して言いますと、A、B、C年を通して、コリントの信徒への手紙一または二から連続して学びます。この手紙は、コリントという都市限定、またパウロの視点に限定されますが、初期の教会状況を映し出す文書です。この時期に福音書によってイエス様の活動について学ぶことに合わせて、そのイエス様を主と仰ぎ集まる教会について、コリント書から学ぶことも大切です。火曜日の「聖書を学ぶ会」でも連続してコリント書を学んでいます。本日はコリント書を中心に学びたいと思います。

聖書日課は、「しかし、主イエス・キリストの名と私たちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされたのです」と「しかし」から始まっています。これは節の途中からが日課となっているためです。その前には、「あなたがたの中にはそのような者もいました」があります。「そのような者」と表現されている人々とは、6章1～8節にある「教会内の争いを教会外の人に訴えてはならない」という事柄の結論部分にある、神の国を受け継ぐことのできない「正しくない者」のことです。そのような人々が教会の中にいた、「しかし」、と今日の箇所が続きます。

コリントの教会は、出来て数年しか経過していませんが、そこに集められる人々は、パウロがキリスト者と想定していた人ばかりではなかったことを認めています。それゆえ、この箇所を通して、「しかし」、キリスト者とは、「神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされた」人であると説明しています。言い換えれば、コリントの教会の人々に対して、そのような人たちとして行動してほしいと、パウロは願っているのです。

12節以降が、この箇所の内容になります。その冒頭でパウロは、「私には、すべてのことが許されています。しかし、すべてのことが益になるわけではありません。私には、すべてのことが許されています。しかし、私は何事にも支配されはしません」と断言します。「私には、すべてのことが許されています」という文言は、10章23節にも出てきますが、格言であったのかどうか不明です。ただし、ここでパウロは、この「すべてのことが許されている」には、「すべてが益になるわけではない」と「何事にも支配されることはない」と、否定、肯定の両面があることを示します。このように語るのには、コリントの教会において、キリスト者になってから、正しくない道を歩んでしまう人が出たからです。すべてが許されているということを勘違いしたのでしょうか。

13節で少し唐突にパウロは、「食物は腹のため、腹は食物のためにはありますが、神はそのいずれをも無効にされます。体は淫らな行いのためではなく、主のためであり、主は体のためにおられるのです」と語り始めます。しかし、「食物は腹のため、腹は食物のため」は、「生きるために食べる、食べるために生きる」と同じ様な響きを感じますが、パウロがこの部分で主張したいのは、食物についてではなく、

後続く「淫らな行い」への注意です。つまり、キリスト者各自の「体」の用い方への注意です。

ここにおいて大切なことは、パウロが単に人間一般の倫理・常識について語っているわけではないということです。それは、14節に「神は、主を復活させ、また、その力によって私たちをも復活させていただきます。あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのですか」という部分からわかります。そこではキリスト者の体が、普通の人間の体であると同時に、主の復活に与る体に、つまりキリストの体の一部だと述べられているからです。ここでパウロは、復活に与る死から自由となった体を、キリスト者が何のために用いるのか、そのことについて述べているのです。

なぜ、あえてそのようなことをコリントの教会の人々に言わなければならないのか、それは、15節後半から18節にある行動が、教会の人々の中で起きたからです。パウロがここで問題にしているのは、もともとそのような行動をしていた人がキリスト者になったことではありません。キリスト者になってから、つまり自分はキリストによって罪をゆるされた、すべてのことが許されている、だからこそそのような「みだらな」行動に向かった人です。パウロが、教会の教えについてしっかりと説明しなかったからかもしれませんが、主なる神様のへの信仰に、律法にまじめであったパウロは、律法以上の罪の赦しと、主なる神様の愛に応える方法として律法を超えるキリストに倣った歩み方、そこから「淫らな行い」が派生するなど想定もしていなかったのでしょう。

この部分の結論として、パウロは「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」(6:19-20)とまとめます。キリスト者の体とは、「神殿」であり買い取られた存在であるということです。それでは、何からも自由であるといっても、「神殿であること」と「キリストに代価を払ってもらったこと」という束縛はあるということです。パウロにとってそれらは、主なる神様の愛に応えるという大前提があるので、束縛ではないのです。しかし、コリントの教会の中の異邦人であった人、つまり、主なる神様ではなく、神々を信じるか否かぐらいの神観の人には、パウロのような大前提はありません。それゆえに、パウロとは別な意味で、「神殿であること」と「キリストに代価を払ってもらったこと」も束縛にはならなかったのかもしれませんが。

このコリントの事例と同じことが今日の教会で起こることはまずないと思います。しかし、教会という主の体が、何のためにあるのかを学ぶことが大切です。それは「神の栄光を示すこと」です。「神の栄光を示すこと」とは主なる神様の本質を示すことです。その本質とはもちろん「愛」ですが、そんなことが人間に可能なのかという問いが起こります。しかし、だからこそ、教会という『聖書』から学び、祈り、共に神を賛美する、キリストの体の一部を共有する集いがあるのです。パウロはそう述べていると思います。

コリントの教会の姿に示される通り、人間の集いである教会はいつでも生成途中です。しかし、キリストの体の一部の集まりであるからこそ、いつでも聖霊を通して、完全へと向かう力を与えられ続けられます。わたしたちの教会も、新しくなる外見に合うように、内面から主なる神様の愛を示す歩みを新たに見出し続けたいと思います。